断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑲

高橋 基

―旭川のカムイコタン㉖―

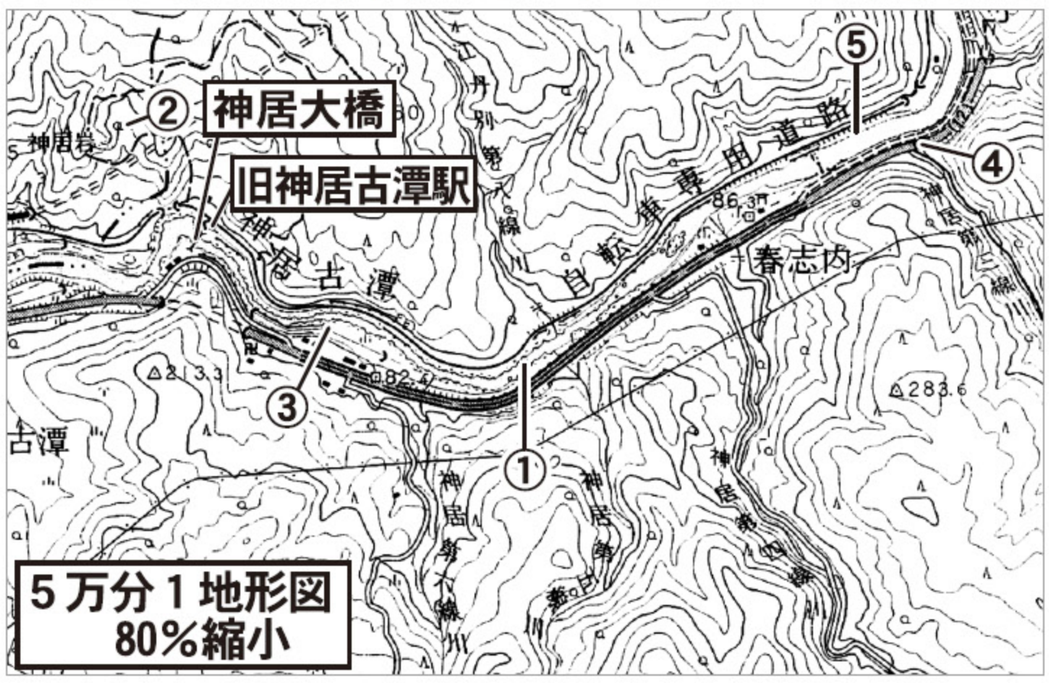
旭川のカムイコタンのニッネカムイとサマイクルカムイの伝説は、掲載地図の②のクッネシリ(kut-ne-sir 岩崖・をなしている・山→現称・神居岩)から、約五・七キロメートル上流の前回紹介したトゥレプサラニプ(turep-sara nipオオウバユリの球根・―を入れた―手さげ籠)と言われた大岩まで続き、掲載地図には収まらないほどの壮大な伝説である。

最上流のトゥレプサラニプ(turep-saranipオオウバユリの球根・―を入れた―手さげ籠)の大岩の名になったトゥレプ(turepオオウバユリの球根)は、ギョウジャニンニクと共に、アイヌの人たちの重要な食料で、「ハルイッケゥ(haru-ikkew 食料・の背骨)→大切な食料」と言われていた。それだけに、両方とも、アイヌ語地名としても、全道各地に残っている。

写真(1)のオントゥレプアカム(on-turep-akam 風化した・オオウバユリの球根・の円盤)は、その代表的な保存食である。写真のものは、丁度二十年前に、杉村フサさん(84)に作っていただいたもの。旭川市の郊外にトゥレプ(turep)を採りに行き、その鱗茎を一片ずつはがして水洗いし、それを臼に入れて杵で突き、ドロドロ状態のものを布で漉して一番粉を採る。残ったでんぷんと繊維質を固めて円盤状にして、指で中央と周囲に穴を開け、発酵、風化させる。出来あがったものに、中央の穴に紐を通して吊し干しし、保存食としたのである。

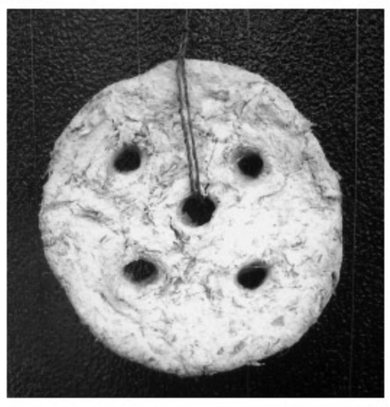
さて、昭和三十五年に、知里真志保は、右の伝説の大岩の下流に、松浦武四郎や永田方正も記録していない、初出の伝説の岩の地名解を次のように書いている。

「サマイクル・イメク・アラケ(samayku-i mek-arke サマイクルの・残した食物・の半分)―文化神の食べ残した食物のかけらだというのが岩に化して今も路傍にある。」



知里真志保が記録したこの伝説の岩は、かなり調査したが、発見出来なかった。後述するが、知里真志保は、レーコロプイラ(re-kor-puira 名・を持つ・激流→有名な激流)の下流に、トゥレプサラニプの伝説の大岩を書いていて、これ自体が位置の誤りなのであるが、写真が添えられていたので判明した。しかし、サマイクル・イメク・アラケは、「路傍」とあるので、道路工事で破壊されたのかも知れない。

写真(2)の「伝説の岩二つ発見」は、昭和四十五年八月二十一日付けの新聞記事である。この新聞記事のコピーは、杉村フサさんのご主人の故・杉村満さんからいただいた。記事内容は、杉村満さんの父の尾沢カンシャトクさん(当時78)と、荒井シャヌレさん(当時78)のお二人が、旭川市教委と旭川市立郷土博物館の依頼で、「神居古潭の奇岩にまつわるさまざまなアイヌの伝説を、現存の古老に〝遺跡パトロール〟してもらう」という企画で、「伝説の岩二つ発見」との見出しで報道された。



昭和45年8月21日
伝説の岩二つ発見
神居古潭 パトロール 鬼の足首と鬼のすね

(1)オントゥレプアカム (2)「伝説の岩二つ発見」

その一つの岩は、今はない「いろは荘」の旭川寄りの木の葉に隠れて見落としがちの「鬼のすね」で、実際の形はあまり似ていない伝説の岩である。

もう一つの岩は、「鬼の足首」で、掲載新聞の写真の上部に⬇印が付されている。これは、掲載地図の④の「ニッネカムイネトパケ(nitnekamuy-neto pake 魔神・の胴体)」の先端部分であることが分かる。当連載の⑮でも述べたが、国道十二号線の拡張工事で、「ニッネカムイの胴体」の大岩が破壊されるところを、杉村満さん等の旭川アイヌ協議会の強烈な陳情で、昭和五十四年に、「ニッネカムイ覆道」として、その姿を残せたのは幸いであった。

杉村フサさんは、この大岩の前の石狩川に、ゴツゴツと見える岩が、ニッネカムイの「あばら骨」である―と、尾沢カンシャトクさんから直接教えられたと語られた。ニッネカムイ伝説の最後の正統な伝承であろう。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します